The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	往生の集としての『撰集抄』
Author(s)	近本, 謙介
Citation	語文. 1990, 55, p. 27-46
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68820
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

往生の集としての『撰集抄』

近本謙介

説話集が、いかなる集としての方法・論理の下に構成されているか、あるいはまた、そもそも全ての説話集についてそのような構造を見出し得るのかという問題は、個々の説話集を対象として、個別に探っていかねばならないと思われるが、それはまた個々の作品を説話集の系譜の中に位置付ける作業にも繋がっていよう。

ここに取り上げる『撰集抄』に関しても、その構造理解を目的としながら、『撰集抄』形成の過程で、西行仮託説話と非仮託説話が併存してきた意味の一端について考察を加えたことがあり、[注1]そこで、『撰集抄』全体の方法ともいえる西行仮託という方法も、集の方法の中に相対化されて位置付けられる点を、最終話の「覚英僧都」創作の方法の中にみた。本稿では、そうした「集」としての方法・論理の一端を、『撰集抄』の往生叙述という表現レベルに即して考えてみたいと思うのである。

一

『日本往生極楽記』をはじめとする往生伝から、『発心集』・『閑居友』・『撰集抄』といった中世仏教説話集への系譜を、往生の文学から遁世の文学へと捉えることに、大きな誤りがあるとは思われない。『発心集』では、往生に失敗した人物等も取り上げられ、長明が往生者の列伝としてこの集を編んだのではないことは明らかであるし、そこで往生の確認そのものよりも、そこに至るための過程を様々な角度から追求したことは、『撰集抄』が度々持ち出す、「心澄む」という詞に集約的に結晶化して受け継がれていくのである。その一方で、往生伝を話材として用いていることは、『発心集』が時折「伝にあり」として出典を明かすこと、また『閑居友』の編者とおぼしき慶政が、往生伝を盛んに書写していることからも知られ、[注2]往生伝の継承といった側面もまた無視できないと思われる。

実際、『発心集』から『撰集抄』に至る中世仏教説話集の性格は、往生伝の継承と展開の様相の中に位置付けることも可能なのではあるまいか。

『発心集』と往生伝との関係については、廣田哲通氏「往生譚の変質―往生伝と『発心集』を視座として―」[注3]、田村憲治氏「『発心集』の世界―往生伝との関わりから―」[注4]等によって、その継承と展開ともいうべき様相が明らかにされており、その内実は廣田氏の

題目にあるように、「変質」という捉え方がなされている。

『閑居友』に関しては、小林保治氏によって、「全体は『高僧→凡僧→俗男→女性』という一応の傾向を示しており、往生伝そのままではないながら、かなりに類似した排列法がみとめられる」ことが確認されており、[注5] 集の構成という点において往生伝を継承していることが知られる。また、美濃部重克氏に「『閑居友』と往生伝との異質性について」[注6] の論があるように、『発心集』の場合と同じく往生伝との質的な違いという点が、集の本質を考える視座のひとつとされている。

それでは、『撰集抄』に関しては如何なる研究がなされてきたであろうか。沼波政保氏は「『撰集抄』における清僧意識」[注7] の中で、

もちろん、道心なくしての信仰は成立しないわけであるが、別表に示したような、機械的な数字の比較をみても、発心譚の増加・往生譚の減少・往生の証明の減少といった点で、多くの善根を積み霊験・奇瑞を望み往生を願う先の時代の信仰と異なり、道心重視へと変化していることを如実に物語っている。

としており、一方、廣田哲通氏は前掲論文の中で往生伝と『発心集』を比較し、長明が求めてやまなかった往生への関心はすでに往生伝の叙述にみるそれではなく、「伝にあり」として往生伝に譲った往生にまつわる奇瑞などは、『発心集』においては切り捨てたという意味合いが強いと結論付けた上で、

では上記の特色は『発心集』ひとりのものであろうか。『撰集抄』、『閑居友』に対して同様の作業（往生伝との比較）を試みると『撰集抄』、『閑居友』にも大体の方向として『発心集』にみたと同じ結論が導ける。ただし両書はなにがしかの往生伝にみえる特質をも備えている。ここでは詳述は省略して、『撰集抄』、『閑居友』の往生譚は大概『発心集』のそれに近く、やや往生伝との中間的性格をもっているという結論のみを提示しておく。

とし、さらに

『撰集抄』には往生の奇瑞もかなりみえ、また前記の構造に示した典型的な往生叙述も少ないながら両書に散見する。

と注を付している。

『撰集抄』を貫流する思想に関する研究は、田村円澄氏「撰集抄・遁世者の宗教的考察」[注8]、また文学の立場からは伊藤博之氏「撰集抄における遁世思想」[注9] 以来、「遁世」という側面を軸になされており、それは遁世者の集ともいうべき『撰集抄』の性格を考える上で、至極当然なありかたといえるが、先にあげた二氏の他に『撰集抄』の往生話そのものを俎上にのせたものはなく、両氏の論においても、数的に減少しているとする沼波氏の検証の結果と、往生の奇瑞もかなりみえ、往生伝と『発心集』の中間的な性格を持つとする廣田氏の見解とは、相容れないように思われる。往生の集としての『撰集抄』にこだわる必要性を感じる所以である。

廣田氏の言う「なにがしかの往生伝にみえる特質」を具体化し、それを往生伝及び『発心集』・『閑居友』の継承と展開の中に位置付けることはできないであろうか。

二

まず、往生に関する叙述の有無を、『発心集』・『閑居友』とそれぞれ同じ人物を描く類話との比較においてみることにする。[注10]

往生に関する叙述を指す用語としては、前掲廣田氏の論考にみえる「往生叙述」の語を、往生にまつわる記述を広く指すものとして用いていくことにする。

『撰集抄』の冒頭話「僧賀聖人の事」と『発心集』巻一第五話「多武峯僧賀上人、遁世往生の事」とは、類話関係にあると思われる。いま両話の内容を対照させると、次のようになる。

『撰集抄』	『発心集』
根本中堂に千夜参籠	僧賀の出自と蹟徳、人に勝れること
← 猶まことの心やつきかねて侍りけん	← 根本中堂に千夜参籠
伊勢大神宮参籠・示現「名利をすてよとにこそ侍るなれ。さらばすてよ。」	← 千夜満ちて後、「いかでか、身をいたづらになさん」という境地に至る
← 佯狂の振舞	← 佯狂の振舞
・「小袖衣みな乞食どもにぬぎくれて」	・内論議の際の饗の、庭に投げ捨てたもの諸の乞食と共にむさぼり食う」
「あかはだかにて下向」	
・「此の禅師は物に狂ふか」と言われるのにも動じず	・「宰相公の物にくるふ」と言われるのに動じず
・師匠の大師の諫めをも聞かず	← 大和国多武峯へ
← 大和国多武峯へ	← 佯狂の振舞
	・后の宮の戒師として
	・仏供養に招かれた際
	・師僧正に対して
	← 命終に際して碁を打ち、小蝶を舞い、辞世の歌を詠んで命終
説話評論	説話評論

説話の展開、ひとつひとつの要素がたいへん類似したものとなっている。(注11)師の慈恵大師良源の描き方も、『撰集抄』では、「名利をすて給ふとは知り侍りぬ、但、かくまでの振舞は侍らじ。はや威儀を正しくして、心に名利を離れ給へかし」と諫めるのも聞き入れず去っていく弟子の僧賀に対して、「大師も、門の外に出で給ひて、はる〳〵と見送り給ひて、すゞろに涙をながし給へりけり。」としており、『発心集』でも、朝廷と交渉を持つ師の態度を、奇行によって非難する弟子に対して、「車の内にて、『此れも利生の為なり』となむ、答へ給ひける」と描いていて、一話全体の構成もさること

ながら、このように師と弟子の微妙な立場の違いまでを巧みに描きだす、たいへん似通った一話として仕上がっていることが看取される。[注12]

こうした両話において、往生に関する叙述という点から比較すると、『撰集抄』がそれに全くふれていないのに対して、『発心集』は四角で囲んだように、最後に命終を語るという違いがあることに気付く。『発心集』の該当部分をあげると、

既に聖衆の迎ひを見て、悦んで歌をよむ。

みづはさす八十あまりの老いの浪
くらげの骨にあひにけるかな

とよみて、をはりにけり。

となる。臨終間際に聖衆の来迎をみるという往生確認のひとつの型であり、この叙述によって、『発心集』における僧賀の往生は保証されていると考えられる。それに対して『撰集抄』が僧賀の往生に関する叙述を全く欠いているのは何故であるのかという疑問も生じてくる。『本朝法華験記』・『続本朝往生伝』・『今昔物語集』・『多武峯略記』等、僧賀を語る先行文献がその臨終を綴っていることも、その感を強くさせるものである。

いまひとつ、『閑居友』との類話についてみることにする。『撰集抄』巻三第三話「播磨国竹の岡の遊女の尼の事」と、『閑居友』下巻第二話「室の君、顕基にわすられて道心おこす事」[注13]は、両書の影響関係を考える上で問題とされてきたものであるが、内容を対照させると次のようになる。

『撰集抄』	『閑居友』
播磨国竹の岡に庵結ぶ尼	
←	
元は室の遊女で、中納言顕基に愛され、都へ上ったが、後に室に戻される	中納言顕基は室の遊人を愛したが後にもとの室の泊へ帰した
←	←
以後、遊女の振舞はしなかった	母に遊女の振舞をしないことを語り、心をすまして念仏にいそしむ
←	←
	母の死
←	←
中納言の内の者で船で西国から上るものに、髪を切り歌を添えて託す	中納言のもとに下ざまに使われる者が都へ上る船に乗って、遊女の振舞によって母の四十九日の供養の金を手に入れ、髪を切って船に置いて去る。
←	←
冒頭に記す「播磨国竹の岡」の庵で心を澄ます	仏事をすませた後、出家して「静なる所」でいみじく行う
←	←

中納言、歌をみて泣きこがれる

←

尼の往生

←

説話評論

• さやうのあそび人などに成ぬれば、人にすさめらるゝはなむどおもひたく思ひ取るまではなからんなる物を……

• 此中納言も、いみじき往生人にていまそかりけりと、伝には載せて侍れば、さやうの事にてやいまそかりけん。つれもなき心の思ひおどろきて、世を秋風の吹きにけるにこそ。今は又、むつましき新生の菩薩どもにてこそいまそかるらめと思はれて、其の事となく哀れにも侍るなり。

中納言、事情を聞いて涙ぐむ

←

説話評論

• さやうのあそび人となりぬれば、さるべきさきの世の事にて、いかなれども恥はみてこそ侍るを……

• 中納言は、いみじき往生人にておはしけると、往生伝にも侍めれば、さるべき事にて、おどろかれぬたもとにもしめかしとて、秋風もふきそめけるやらんとまでおぼゆ。

室の遊女の母に関する言及の有無などに異同はあるものの、いわゆる説話評論部には同文的一致がみられ、全体の構成も類似している。そうした中で、『撰集抄』が尼の往生を語り、『閑居友』がそれを欠くのは、説話構成の上で異同をきたしている部分である。『撰集抄』が『閑居友』の同話を下敷きにしているとすれば、なおさらのこと、尼の往生は『撰集抄』編者が、意識的にこの説話に取り込んだ要素なのであり、この説話の機能を比較する上で無視できない問題を孕んでいるように思われる。[注14]

『撰集抄』が尼の往生を記す部分をあげることにする。

此尼は、只わく方なく朝暮念仏し侍りけるが、終に本意のごとく往生して、来たりをがむ人多く侍りけり。

其庵の跡とて、今の代まで朽ちたるまろ木の見え侍りしは、柱などにこそ。只、すこしすぐなる様したる木の、節などもさながらいぶせくて侍りし、見侍りしにこそ、すぞろに昔ゆかしく思ひやられて侍り。

傍線部のように、「往生」という語そのものによって、この説話においては尼の往生が保証されている訳であるが、続いて記される仮託西行による遺跡の確認、また先の『閑居友』との対照表の説話評論部における傍点「此中納言も」と「此中納言は」の異同、さらには『閑居友』にはなく『撰集抄』が独自に記す末尾の傍線部からして、尼の往生は『撰集抄』巻三第三話において、欠くべからざる要素であり、一話としての機能を支えているように思われる。

さて、『撰集抄』説話と『発心集』・『閑居友』の類話との比較を試み、そこに現れる往生叙述の有無をみてきたが、この二例の結果は、次のようになった。

a
- 『撰集抄』巻一第一話　往生叙述なし
- 『発心集』巻一第五話　往生叙述あり

僧賀説話

b
『撰集抄』巻三第三話　往生叙述あり
『閑居友』下巻第二話　往生叙述なし
室遊女説話

この二例を取り上げただけでも、『発心集』にある往生叙述がなかったり、逆に『閑居友』にはない往生叙述を取り込んだりと、『撰集抄』の往生叙述は複雑な様相を呈している。『撰集抄』の往生叙述には、集としての何らかの法則性はないのであろうか。

二例の結果をながめると、両話において対照的な要素として、説話主人公、つまり往生叙述がなされる人物（主体）が、僧賀と室の遊女という、少々乱暴な言い方をすれば、往生に最も近い者と遠い者ともいうべき違いがあることは注意されてよいであろう。

ここにひとつの仮説を立てて、その検証に入りたい。すなわち、『撰集抄』における往生叙述の有無は、それが記されるべき説話中の人物によって規定されているのではないか。

三

往生伝の定型を小林保治氏は、

A、（往生者の僧俗の別）。僧位または官職名、法名または俗名。
B、出身地・居住地。出自・出生。
C、性向・少年時のこと。
D、経歴　a出家の機縁・契機。b行業の内容。c存在時の奇瑞。
E、歿年時・享年（これは［H］の後に置かれる場合もある）。
F、往生の予知・予言。
G、臨終時の行儀・奇瑞。
H、死後の奇瑞・往生の確認。

としているが（注15）、このうち最も典型的な往生叙述はF・G・Hということになろうか。ここでは、これら典型的な例をはじめとして、何らかのかたちで往生にふれたものまでを含めて、『撰集抄』の往生叙述として検討することとしたい。

巻一の各話を取り上げることにする。巻一の八話について、往生叙述の有無という点から分類を試みると、次のようになる。

◎往生叙述のみられるもの
第二話「親の処分被る二押し取ら一事」・第三話「乞食法師帷を返す事」・第四話「伊勢の長歌の事」・第五話「坐禅せる僧の事」

◎往生叙述のみられないもの
第一話「僧賀聖人の事」・第六話「越後国の市の老者の事」
第七話「新院の御墓白峯の事」・第八話「行賀僧都耳を切る事」

まず、第八話は山階寺（興福寺）の僧行賀僧都が、悪瘡に悩む者のため耳を切って与えて、その後寺を離れ三輪に遁世し、後に十一面観音が慈悲の深さを試したのであることがわかるというものであり、叡山からの再出家をはたした第一話の僧賀の説話と同じく、高僧の寺院からの再出家を扱ったこれら二話には往生叙述はみられない。第六話、第七話はそれぞれ、「越後国したの上村」と白峯の「新院の御墓所」での仮託西行の見聞と感懐であり、一話のうちに特定の人物の出家遁世話としての性格を持ち合わせていないこれら二話にも、往生叙述は見出せない。

それでは、巻一における往生叙述とはいかなるものか。それと認定した叙述を、その往生叙述がなされた人物および説話内容とともにあげることにする。

◎第二話
人物　形ばかりなるいほりむすびて、深く後世のいとなみする人
内容　祇園の託宣によって出家遁世。親の処分を押さえ取った人物も後を追う。
往生叙述　かくて二とせと申しける三月十四日の暁に、先に世を遁れ給ひし人は、西にむき座し、後に家を出で給ひし聖は、かの座せる上人のひざを枕にて、眠れるごとくして終りをとり給へり。明けにしかば、人雲霞のごとく走り集まりて、往生人とて結縁をぞし侍りける。其形をうつしとゞめて、今に侍るとかや。

◎第三話
人物　いづくの者ともしられで、さそらへありく僧
内容　与えられた帷を無用とし、法文を問う印西に対して、それを「見るやいかにあだにも咲けるあさがほの花にさきだつけさのしら露」の歌に託して詠み、行方知れずになる。
往生叙述　此事、江帥の往生伝に注し載せ給へり。見すてがたさに、たくみのこと葉をいやしげに引きなし侍る也。見及ばざるにはあらず。彼記には、「平の京東山霊山のほとりにて往生の素懐をとげぬ」と侍るをみるに、すゞろに涙おちて侍りき。

◎第四話
人物　国行の三位
内容　七条の皇后崩御の後、伊勢の詠んだ長歌に嘆きが募り、出家遁世。
往生叙述　道心のさめ給はざりければこそ、又も見え給はざりけめと、貴く覚え侍り。さても往生の素懐をとげ給ひなば、最初引接の人にては、伊勢のみにてこそ侍らめと、すゞろにあはれに侍り。

◎第五話
人物　日かげももらぬ木の本に、形のごとくなるいほりむすびて、坐禅せる僧（武勇の家の生まれ）
内容　「生死の無常のおそろしく覚えて」出家。その後更に宇津の山辺に遁世。
往生叙述　さても、いま又いかなる浄土にかおはすらんと、返々もうらやましく侍り。

第二話において、「西にむき座し」、「眠れるごとく」終わるのは、いわゆる臨終正念を表わしており、往生叙述のひとつと考えられよう。(注16) だからこそ、「往生人とて結縁」されることになるのである。第三話の「江帥の往生伝」が匡房の『続本朝往生伝』を指すとすれば、現在の同書には見当たらず、何らかの錯誤あるいは意図的改変としておくしかあるまいが、評論部において編者が言う「たくみのこと葉をいやしげに引きな」す説話叙述の中で、説話末尾を「其後はいづちへかさそらへゆきにけん、ふつとみえ給はずとなむ」と締め括り、「されば、いかなる智者の心を発せるにておはしけるやらん。返々もゆかしく侍り」として、往生叙述に至らない点をも考慮すべきであろうか。第四話において編者は傍線部のように、「道心」と「往生」の二段階を想定した語り方をしており、「往生の素懐をとげ給ひなば」と「往生」が仮定条件として語られるのは、国行の

三位の出家遁世（道心）が、そのまま往生に必然的に結び付くものではないという認識の下に綴られていることを意味しよう。第五話においては、編者は評論部で僧の往生に思いを致している。

巻一における往生叙述は、往生伝のように奇瑞を並べたてるという性格のものではなく、その方法も、説話中に往生の事実が示されるもの（第二話）から、評論部に説話中の人物の往生に関心を示す一節を付すものまで、必ずしも一様ではない。しかしながら、往生叙述がなされる人物は、「形ばかりなるいほりむす」ぶ僧（第二話・第五話）や、「いづくの者ともしられで、さそらへありく僧」（第三話）、俗人としての位や武士を捨てた者（第四話・第五話）と、いづれにしても教理教文などとは無縁に出家遁世した人々である。これらの人々の出家の様は、「はや、手づから本鳥を切りて、妻子にも、かくともいはずして」（第二話）、「いよ〳〵なげきのかさなり給ひて、手づから本鳥押し切り、たちまちに妻子をふりすてゝ」（第四話）、「としごろの女なん身まかりにしかば、いよ〳〵心もとゞまらで、本鳥切りて」（第五話）と、定型化されてはいるが、どれも切迫感のあるものである。妻子をふり捨てなければならないような立場の者なのである。このような形で「道心」を起こした人々に対する編者の認識は、それがいつ何時醒めるともしれないものであって第四話の評論部に象徴的に語られるごとく、「道心」＝「往生」ではなく、あくまでも往生は仮定条件なのである。そこに、何らかの形で往生に関する叙述が必要とされる原因があったのではなかろうか。そうした往生を約束されない人々と対極的な存在として、第一話の僧賀聖人、第八話の行賀僧都のような、再出家をはたした高僧を位置付けることができると考える。編者が一話の中に敢えて往生叙述を必要としない彼らは、寺院からの再出家をはたした時点で、すでに往生を約束された人々なのであった。

四

巻一にみられる往生叙述の性格は、『撰集抄』全編にわたって現われるものであろうか。『撰集抄』から往生叙述をひろった表をもとに考えてみたい。表中、「往生叙述」の項の末尾に付した、（説）・（評）の記号は、その叙述が説話中、評論部いずれにあるものかを示している。

◎『撰集抄』における往生叙述

番号	巻	話	人物	往生叙述
1	一	2	形ばかりなるいほりむすびて、深く後世のいとなみする人	かくて二とせと申しける三月十四日の暁に、先に世を遁れ給ひし人は、西にむき座し、後に家を出で給ひし聖は、かの座せる上人のひざを枕にて、眠れるごとくして終りをとり給へり。明けにしかば、人雲霞のごとく走り集まりて、往生人とて結縁をぞし侍りける。其形をうつしとゞめて、今に侍るとかや。（説）

2	一―3	いづくの者ともしられで、さそらへありく僧	此事、江師の往生伝に注し載せ給へり。見すてがたさに、たくみのこと葉をいやしげに引きなし侍る也。見及ばざるにはあらず。彼記には、「平の京東山霊山のほとりにて往生の素懐をとげぬ」と侍るをみるに、すゞろに涙おちて侍りき。（評）
3	一―4	国行の三位	道心のさめ給はざりければこそ、又も見え給はざりけめと、貴く覚え侍り。さても、往生の素懐をとげ給ひなば、最初引接の人にては、伊勢のみにてこそ侍らめと、すゞろにあはれに侍り。（評）
4	一―5	日かげももらぬ木の本に、形のごとくなるいほりむすびて、坐禅せる僧（武勇の家の生まれ）	さても、いま又いかなる浄土にかおはすらんと、返々もうらやましく侍り。（評）
5	二―2	山の中に、いづくの者ともなくてすみわたる僧（青蓮院法眼真誉）	さても猶、御いのちのきえやらで、あめの下にながらへていまそかりもやすらん、いまは又、浄土にもや生れ給ひにけむ。（評）
6	二―3	海にむかひて、かたばかりなるいほりむすびて行ふ法師	「おのれは、暁往生し侍るべければ、いまを限りの対面もあらまほしくて、出で侍るなり」 ← 言ひしごとく、暁いきたえてけり。あやしき雲そらにそびき、つねならぬ香いほにみちて、ねぶれるがごとくして、西にむき、手をあわせて侍りけり。（説）
7	二―5	いといたうまずしからず住みける男	人々まかりて見侍りければ、西に向かひて手をあはせてなむ、息たえにけり。あさましくかなしくおぼえて、いそぎ人にふれなどして、来をがみ侍りけるとなん。（説）
8	二―6	猛将のむすめ	さて、この女は尼になりて、この山の中にいほりむすびて、おもひ澄まして侍りしが、此廿余年のさきに往生して侍るなり。そのいほりのかたち今にあり。見よ」と申し侍りしかば、彼の人とともなひて、山のおくに入り侍りて見るに、口三間なる屋の伸さびて、かたばかりのこりし、み侍りしかば、かきくらさるゝ心ちして、いまさら物もおぼえず侍りき。（説）

			← いまはいづれの浄土にか生れぬらんと、返々ゆかしくおもひやられて侍るぞや。（評）
9	三―3	庵結びて行ふ尼（室遊女）	此尼は、只わく方なく朝暮念仏し侍りけるが、終に本意のごとく往生して、来たりをがむ人多く侍りけり。其庵の跡とて、今の代まで朽ちたるまろ木の見え侍りしは、柱などにこそ。（説） 此中納言も、いみじき往生人にていまそかりけりと、伝には載せて侍れば、さやうの事にてやいまそかりけん。（中略）今は又、むつましき新生の菩薩どもにてこそいまそかるらめと思はれて、其の事となく哀れにも侍るなり。（評）
10	三―3	醍醐の中納言顕基	今日みまかり侍るべし。如何ならむ山中にても這ひ隠れ侍らんと思ひ侍りつれども、往生をなん遂げ侍るべきにて侍れば、誰々にても縁をひろく結び置かんと給ふれば、此殿の傍にてと思ひて侍り。 ←
11	三―4	観釈聖（なま公達）	実に面白き所に、石の上に西向きになん手を合はせていまそかりけるが、げに其まで、やがて息絶えてけり。紫の雲上におほひ、妙なる香御所に満ちてぞ侍りける。人々集まりてし拝みけるなり。其形代をうつし留めて、同じ石にすゑ給へりける、今に侍り。（説）
12	三―8	あやしの僧（正直房）	保延二年二月十五日、もゝすぢりゆがみ房、まがるながら往生しぬと目出度き手にてかけり、あまりに悲しう貴みて、其の国の人々、皆々力をあはせて、いかゞして聊もたがへず、形代をなんうつし留めて置き奉り侍り。（説）
13	四―1	平三郎真近といふ弓取	さても今は何の浄土にかいまそかるらん、返々ゆかしく侍り。（評）
14	四―4	範円聖人（吉田の帥の中納言経光）	かゝる所に身を一つかくすべき庵引きむすび、左の板の月輪より、香煙ほそくそびきて、空に紫雲の種をまき、念仏の声しづかにて、西に聖衆の迎へを待ちておはしましけるが、天承の比、うせ給ひにけり。まことにいみじき往生し給ひけるとなん。

15	四―5	中納言顕基	（説） さて、中納言入道は、草の戸ざし閑にして、いひしらず目出たく往生をし給へりと、遊心集にのせられて侍りしを見侍りしに、其事となく涙の落ちて、あやしきまでに侍りき。（評）
16	五―1	永昭大僧都（山階寺）	此僧都、最後臨終のありさまいかゞ侍りけむ。返々ゆかしくおぼゆれども、そのをはるところを知らず。いまは何の浄土にかいまそかるらむ。ことにしのばしくこそおぼえ侍れ。（評）
17	五―2	大瀬の三郎近宗	「今日より五日はさしな入り給ひそ。ちとつゝましき事侍り」といふ。「さらなり」とことうけして、約束のまゝに五日さしも入り侍らず。かくて、五日すぐるやおそしと、六日の朝、彼所へ行きて見ければ、西にむかひてをはりにけり。其姿いきたる人のごとし。（説）
18	五―3	内記入道保胤	此心ばせのおはしましければ、つひに出家して、往生の素懐をとげ給へりけるなり。（説）
19	五―6	中納言の局	西にむき掌を合わせ、威儀を乱らずしてをはりにけり。憂喜の心に忘られたりと侍りしは、実にて侍りけりと思ひ定めて、なく〳〵帰りにき。（説）
20	五―9	真範僧正（山階寺）	さても、此真範は、つたなげなる姿にやつれ、又大和国に帰りて、三輪山のふもとに東に向ひて、南無春日大明神とて、ねむるごとくしてをはりをとり給へりと、伝にはのせ侍り。（説）
21	五―10	男（近江国）	かくて、はるかに本国をはなれて、讃岐国志度といふ所にて、西にむかひ掌を合はせて往生し侍りけり。（説）
22	五―11	（江口柱本遊女）	彼遊女の中に、多く往生をとげ、浦人の物の命をたつものゝ中に、終いみじき侍り。こは、さればいかなる事ぞや。前世の戒行によるべくは、何とてか今生にかゝるうたてきふるまひをすべきや。此世のつとめによるべくは、あに彼等往生をとげんや。これをもて静かに思ふに、たゞ心によるべきにや。（評）

23	六―2	（後冷泉院・女院・後三条院・宇治大相国・大二条殿・赤染衛門・大江挙周）の死から	此理を心にかけて、つねに仏の御名を唱へ奉り給はゞ、往生の大事は、よもとげはづし侍らじ。大方は、妻子をすてゝ、よろづを閣きて勤めんこそは、いみじき事にて侍るべけれども、（評） そのあかつき、西にむかひて念仏してをはりをとり侍りき。
24	六―5	西住聖人	← かくて高野へ帰りて、夢見るやう、ありし聖人来りて、我は都率の外院に生れぬと見て、夢覚めにき。かくきゝし後は、内院にあらざる事のうらめしさよとおもふかたも侍れども、外院もまた貴くぞ侍る。もし昔のごとく在俗にて朝に宮仕せしかば、あに外院の往生をとげましや。（説・評）
25	六―8	信濃の国の禅僧（同行と二人）	うるはしく座して、眠る様にて息絶え給へる人なり。木の枝に紙にて札を付け給へり。 紫の雲待つ身にもあらざれば　すめる月をぞいつまでもみる （中略） まよひつる心の闇をてらしこし　月もあやなく雲隠れけり と書きをはりて、筆をもちながら眠るやうにして終られぬ。 ←
26	六―9	恵遠法師とその父母	さても、最後臨終もあひ、けぶりともなし奉り、骨をひろひて高野にもよぢのぼり、彼聖たちのふでの跡をもとりとゞめ、歌をも詠じ侍れば、さだめて彼二所のちからにて、我も浄土へみちびかれ奉らんと覚えて、うれしく侍り。（説・評） 恵遠は都率の内院に生れ、父母は西方の往生をとげけりと、漢の明記にのせたり。 （評）
27	六―10	時朝の大納言の若君（仲太小三郎、のちの性空の罪をかぶる）	されば、かの若君の得脱は、よもさはり侍らじと覚え侍り。最初発心の時より、久修堅固のいまゝで、おこたりなく行ひ給へば、今は彼若公は霊山浄土にや生れていまそかるらん。（評）
28	七―3	如レ形ノのいほりむすびてをれ	過ぎにし延久の比、かのいほりにて、三月廿五日の暁に、をはりをとり給へり。音

	る僧		楽空にきこえ、異香室にみちて、往生し給へりと、伝にはのせて侍り。（説） 此人のありさま、拾遺伝にのせたりしを披見せしに（評）
29	七―6	（恵心僧都・内記入道保胤）	或時、内記入道保胤、往生の雑談せまほしくて、恵心僧都の室におはして、つねに住み給ふ所をあけて見給ふに、（説） なにともあれ、その里の人は往生たのもしくぞ侍るめる。（評） （無相房は水にぬれない奇瑞あり。さらに、「観音なんどの化して、衆生をすくひ給ひけることやらん」とされる。）
30	七―7	かくのごとくの庵むすびて、あかしくらせる僧（無相房）と結縁した里人	紀伊国根来といふ所に、庵を結びておはしけるが、七十二といひける三月三日なん、往生の素懐をとげ給へり。空に楽きこえ、地に花ふりて、まことにめでたくて終りをとり給へりとなん。（説）
31	七―8	覚鑁聖人	四日までは念仏のきこえけれど、五日の暁より、念仏の声たえければ、人々あやしみて行きて見るに、西に向きて手をあはせて、ひきいりにけり。日比のほいのごとく、実の往生をとげにけり。（説）
32	七―15	或山中に柴の庵結びて、尼のやせおとろへて、かほより始めて手足まことにきたなきあま	← 何とてか、此尼の往生をとげざるべき。（評）
33	八―2	都良香	さても、都良香は、十二因縁心裏空といふ御詩を日に三度唱へて、後世のつとに向けけるに、はたして此意をさとりてをはりをとりけるも、有がたく貴くぞ侍る。（説）
34	八―28	平等院行尊僧正	ぬしは今はいづれの浄土にか居ますらむに、手跡はひとり率都婆の面にのこりけるこそ、思ひ入れ侍れば、あはれにかなしみて、涙も所せきまでに覚え侍れ。（説・評）
35	八―30	恵心の僧都	七旬かたぶき給ひて後、横川にて御身まかりけるに、胸の間に青蓮華三本侍りけり。かたじけなくぞ侍る。（説）
36	八―31	紀四郎奉成といふ農夫	あはれ貴くぞ侍る。現世の徳益あらたなり。後世あにうたがはんや。恵心僧都の蓮

			は生ひん事、希奇に侍らじ。これはたとへなき事にはあらずや。（中略） さても、この奉成はいづれの所にか生じて、観音の御あはれみを深く蒙らむと、返々もゆかしく侍り。（評）
37	九―3	安養の尼	其後は、いよ〳〵心を発して、むらなく勤め行ひ給ひけるしるしありて、最後臨終の夕べに、まさしく紫雲空にそびき、天花交はり下りて、往生の素懐をとげ給へりける、返々もいみじく侍り。（中略） 其後、六とせを経て、思ひのごとく僧都の教化にあづかりて、本意のまゝに往生し給ひてけり。（説）
38	九―8	江口の遊女	彼遊女の最後のありさま、なにとか侍るべきと、返々ゆかしく侍り。（評）
39	九―11	権少僧都覚英	そばなる松の木をけづりのけて、かくかきたり。 昔は応理円実の学徒として、公家の梵莚につらなれり。いまは諸国流浪の乞食として、をはりをくづのまつばらにとる。 世の中の人にはくづの松原と　よばるゝ名こそうれしかりけれ 于時、保元二年二月十七日、権少僧都覚英、生年四十一、申尅にをはりぬ（説）

これらを叙述の内容の面から、小林保治氏の往生伝の叙述と照らし合わせてみると、6・11・12・17・39などは「往生の予知・予言」に当たるものであろうし、1・7・11・17・19・20・21・24・25・32は「臨終時の行儀」の要素を、6・11・14・17・28・31・35・37は「臨終時の奇瑞」の要素を持っている。「死後の奇瑞・往生の確認」には24が該当しようか。小林氏の分類のHに「歿年時・享年」があるが、『撰集抄』の場合、12や39のように往生する人物自身が何かに書き付けるというものがあって、これらは往生伝におけるそれとは異なるものであるから、主に「往生の予知・予言」に分類しておいた。こうして見ると、『撰集抄』の往生叙述のおよそ半数は、往生伝における叙述の範疇に入るものであることになる。

それでは、その定型から外れるものはどのようなものか。まず第一に、最も直接的に「往生」の語のみをもってその人物の往生を記すものである。2・8・9・10・15・18・26がそれであるが、これらは「其庵の跡とて、今の代まで朽ちたるまろ木の見え侍りしは、柱などにこそ、」（9）のようにその遺跡を伴うものや、「恵遠は都率の内院に生れ、父母は西方の往生をとげけりと、漢の明記にのせ

たり」（26）のごとく出典とするものの内容を要約して受け継いだものなどが目立つ。次に、評論部において、説話中の人物の往生に思いを致す一節が記されるという一群がある。4・5・8・9・10・13・16・27・30・34・36・38である。これは「さても、いま又いかなる浄土にかおはすらん」（4）といったほとんど定型化した一節となって現われる。さらに、3・22・23のように、往生に関して一種の理論化を計ったものがみられる。これらに分類し得ず残ったものは、29のように、一話の主眼は別のところにありながら、保胤が「往生の雑談せまほしくて」恵心僧都を訪れたというものと、往生の語はないながら結果として往生を意味しているのであろう33の都良香[注17]の二例のみである。

叙述の内容の上からの一応の分類を終えたが、これらを説話中の人物に着目してみるとき、いかなる結果が得られるであろうか。

『撰集抄』説話中、何らかの往生叙述が見られるのは、「いづくの者ともしられで、さそらへありく僧」（2）や「如レ形ノのいほりむすびてをれる僧」（28）に代表されるような名も無い法師や、「形ばかりなるいほりむすびて、深く後世のいとなみする人」（1）に類するような元々在俗であったもの、さらには在俗の娘、尼、遊女等がほとんどを占めており、巻一でみたのと性格を一にしている。

例外的に高僧を扱ったものも、例えば5は往生の可否ではなく、未だ生存しているか既に往生を遂げたかが問題とされたもので、16にもそれはあてはまると考えられ、また34も行尊僧正の往生を前提とした叙述となっていることに気付かされる。最も典型的な往生叙述として、「臨終時の奇瑞」の要素を持つものをみても、35は再出家話になっておらず、往生そのものではなく恵心往生の際に生えた青蓮華の沙汰に専ら関心があるのであって、純粋に論旨の上から問題があるのは31の覚鑁のみである。その他「ねむるごとくしてをはりをとり給へりと、伝にはのせ侍り。」とする20と、往生の予知の叙述ともいえる没時を書き残して逝った39の例を含めて、計三例ほど問題があるものを残す事になるが、『撰集抄』中には、高僧を扱った説話が三十話近くあり、それらのほとんどに往生叙述が見出せない点に、むしろ注目すべきであろう。

やはり、『撰集抄』における往生叙述の有無は、それが記されるべき説話中の人物と密接な関係があるようである。

そのことは第一に、往生伝との異質性を物語る。高僧に始まり在俗の者に至る、その全てに往生の奇瑞・確認を記す往生伝に対して、『撰集抄』で往生の際の奇瑞が記されるのは、31を除けば在俗から出家遁世したものや尼などで、これらが『撰集抄』が記す往生の奇瑞の実態であることは、互いの集としての方法が異なる事を示しており、これを『撰集抄』における往生伝の継承と展開の一様相と捉えることもできよう。往生伝が往生の確認によって、一話としての完結性を持つのに対し、『撰集抄』は往生の確認を必要とする説話と、敢えて必要としない説話とが併存しつつ、集としての往生叙述の論理の下に構成されているのである。

五

『撰集抄』における往生叙述の論理を、さらに探ってみたい。まず、往生叙述があって然るべきとした人物を扱う説話の中に、それがなされていないものがあるのではないかという問題がある。

巻二第八話は侍従大納言成通卿に仕えた「いづくの者ともしらぬ

法師」、巻三第八話は里を廻って人に仕える「あやしの僧」、巻七第九話は一条次郎義景なる武士のもとに仕えた「つたなげなる僧」について語るもので、玄賓像を付与された正直房型説話ともいうべき一群の説話である。これらは往生叙述がなされて然るべき説話であるが、巻三第八話にはそれがあるのに対して（前節の表12）、他の二つには見当たらないのは何故か。

巻二第八話と巻七第九話が、敢えて往生叙述に及ばなかったのは、説話中の傍線部の要素と関係があるのではなかろうか。

◎巻二第八話

或日のくれに、ありし僧来たりて、「君の煩ひ給へる歌、思ひよりてこめ侍れ」とて、

水のおもにふるしら雪のかたもなく　消えやしなまし人のつらさに

うらむなよかげみえ方の夕づくよ　おぼろけならぬ雲間待つ身を

とよみて、にげさり給ひけるを、袖を引きとめて、「誰人にてかおはすらん、此日比の情に、たしかにのたまはせよ」と侍りければ、「泊瀬山の迎西」とてなん、ふりほどき出で給ひにけり。

◎巻七第九話

さて、住みつる所を開けてみれば、まことに、目出手跡にて、日々記をし侍り。何事ぞとてみれば、いく〳〵かの日は頭燃をはらふおもひをなして、念仏三百反申し、又その日は戌の半まで座禅し、又次の日は不浄観、或時は唯識観を修すなんどいふ、一筋に観法懃の日記にてぞ侍りけり。

前者では引用部分以前に、施行をしていることが人々の知るところとなって、「よしある人にこそ」と思われており、この詠歌によって「誰人にてかおはすらん」と、名を尋ねられるに至っている。後者はここで、種々の行いや観法をこらしていたことが露見して、「誰といふ智者の徳をかくし、つぶねとなされけるやらん」と評論部に記されている。なるほど巻三第八話にも、「如何なる智者の、一挙万里によぢて徳をかくして、五とせの程、心安きつぶねと成りていまそかりけむ」と記すが、それも往生の事実を語ってはじめて綴られるのである。巻三第八話の正直房には詠歌や観法といった隠徳の僧である事を証すような説話要素はみられない。それに対して、詠歌や観法といったかたちで隠徳の僧たることが露見した彼らは、もはや「いづくの者ともしらぬ法師」でも「つたなげなる僧」でもないのである。彼らを隠徳の高僧、すなわち往生して然るべき人物とした設定が、これらの説話に往生叙述を必要なからしめたと思われる。いわゆる正直房型説話にも一話としての方法に違いがみてとれるわけである。

これと同じ理由から、往生叙述のなされない一群の説話があると思われる。一、二例あげると、巻七第二話で帥大納言経信卿等が遭遇した、「帷一つをなんきたる僧」の説話には、

「法文の心のはるけぬべき、のたまはせよ」と、あながちにせめられて、「煩悩即菩提、生死即涅槃」と云ふ文をぞ誦し侍りける。「さればこそとよ。只人にはおはせざりけるに」とて、かさねて此文の心などとひあはれければ、日比のやみもはるゝばかりいひければ、（中略）

俊頼朝臣かく、

なきてぞ帰る春のあけぼの
とのたまひたるに、此僧やがて、
又もこむ秋をたのむの雁だにも
とつけたるに、いよ〳〵おもひまして帰りき

とあり、巻五第五話の「いづくの物と行くへも知られぬ僧」には、

や、もの語りきこえて後、「さても実の法文一言承らん」と聞えけるに、此乞食僧うちわらひて、かく、
なるこをばおのが羽風にゆるがして　心とさわぐむら雀かな
とよみ捨てゝ、かくれ去りぬ。

とあって、法文を強引に問われ止むをえず答えて去るという、隠徳の僧であることが露見するパターンの説話である。同類のものとして、巻二第七話・巻三第一話・巻五第七話・巻五第一三話・巻六第四話・巻七第一〇話・巻九第七話をあげることができ、これら全てに往生叙述が見出せないことも、先と同じ理由として説明できると考える。

ひとつ注意すべきは、法文を問われたのに対して、歌に託して答えるものが多い点で、そうして答える事が法文と同じ機能を有することは、数寄往生の問題とも関わり、また巻八の説話群を考えるひとつの手だてともなろう。

こうしてみてくると、『撰集抄』における往生叙述はかなり組織的で、各話の往生叙述の有無には、集としての論理が作用しているように思われる。

次の問題に移ることにする。先に巻一第四話（表3）を例に一時の道心がそのまま往生に結び付くのではなく、往生が仮定条件とされる人物について往生叙述がなされるとしたが、その背後には如何なる論理があるのであろうか。『撰集抄』の表現レベルからおさえていきたい。

巻八第三一話（表36）の評論部では、農夫の奉成に対して後世の往生の疑うべからざることが述べられ、前話の恵心僧都の往生の際の奇瑞をふまえて、次のような一節が付される。

恵心僧都の蓮は生ひん事、希奇にはべらじ。これはたとへなき事にはあらずや。

「これ」は、奉成が現世において粉河の観音から、薬として蓮の実を賜った奇瑞を指している。恵心と奉成を対比させ、恵心に対してはその奇瑞を然るべき事とし、奉成に対してはこの上もないこととする根拠は、恵心僧都と農夫の奉成という人物（説話の主体）の差以外に求めようがあるまい。さらに奉成はこの奇瑞によって、「後世あにうたがはんや。」と往生の保証を得ているのである。

類似の構図は巻九第三話（表37）の、同じく恵心僧都と安養の尼との関係にもみられると思われる。「思ひのごとく僧都の教化にあづかりて、本意のまゝに往生」したとされる安養の尼の説話の後に、次のように記される。

誰もさるほどのいみじき人を親しき方にもちたらば、なにしにか、のちの世をもしそらすべきとおぼえ侍れども、更にかひなし。

安養の尼は、往生して然るべき恵心僧都を「親しき方」に持ち、その教化に与ることによって往生の保証を得たのである。

恵心は「いみじき人」なのであり、往生の叙述、言い換えれば一話の中での往生の確認が何らかの形でなされる必要があるのは、その対極に置かれた、往生することが必然とは考えられていない、奉

成のような「下れるきはの物」（36説話部）なのである。その往生叙述を引き出すのは、

下れる人は、いかにも情のすくなくて、たださしあたりたる事のみを思ひて、のちのよの罪をば、さしはなちて思はざるめる（7評論部）

か様のきはの人は、後世の事心にかくる事は侍らぬ（32評論部）

という「きは」の意識と無縁ではありえない。奉成の人物設定を、

下れるきはの物は、さしあたれる朝夕の煙りをたゝするはからひのみにて、後世の事、露心にかけざむめるを、奉成、可キレ然ル先世の宿善や、日をへて熟し侍りけん、粉河の観音を深く信じ奉りて、

として説話が語られるのもよい例であろう。

そのような「きは」のひとつとして遊女が考えられ、編者自身、表22にあげるような理論化を図る必要があったのである。しかしながらその叙述も、「遊女」や「浦人の物の命をたつもの」の往生の事実をふまえてはじめて、「たゞ心によるべきにや」という結論に達していることに注意しなければならない。集中におけるその具体例のひとつがまさに巻三第三話の室の遊女の往生話であり、『閑居友』にみられない往生叙述を『撰集抄』が付け加えたのは、集としての往生叙述の論理に支えられた、集中の一話としての機能を果たさせるための、編者の必然であったのである。

『発心集』にみえる僧賀往生の叙述を『撰集抄』が記さないのは、同じ論理の裏返しの結果と考える事ができよう。『撰集抄』編者にとって僧賀往生の要素は、集中の一話として是非とも必要な要素ではなかったのである。

六

『撰集抄』にみられる、集としての往生叙述の論理は、『発心集』・『閑居友』にもあてはまるであろうか。

『発心集』には、『撰集抄』と同じ基準で、四十九例ほど往生叙述が確認できるが、僧賀の他に、巻一第四話の千観内供・巻四第四話の叡実阿闍梨・巻七第二話の空也上人などに往生叙述がなされる一方で、『撰集抄』において往生叙述が必要とされたような人物にも等しくなされており、少なくとも説話中の人物が呼び出す説話要素としての往生叙述という性格はみてとれない。往生叙述を記さない説話の面からみても、『発心集』は夢告や奇瑞といった典型的な往生叙述を、「伝に有り」として往生伝に譲るが、それに該当する説話の人物をあげると、

千観内供（巻一第四話）・南つくし（巻一第六話）・幸仙（巻一第八話）・伊予入道〔伊予守源頼吉〕（巻三第三話）・義叡（巻四第一話）・叡実阿闍梨（巻四第四話）・肥後の僧（巻四第五話）・空也上人（巻七第二話）・賀茂女（巻七第四話）・源親元（巻七第一一話）

と、有名無名の僧、さらに在俗の男女の別なく夢告や奇瑞といった往生叙述は省略されており、往生する人物と往生叙述とに因果関係は見出せない。

「『往生伝』においては圧倒的多数をもって占められる、いわゆる信心深く行徳高い人物が、立派な行業を行なった結果往生するといった形での往生譚は、発心集ではほとんど取られておら」[注18]ない

ように、往生に至る行の多様性に長明の関心は注がれているのであって、誰がという主体に関する意識が往生叙述と直接結び付くことはないのである。ここに『発心集』と『撰集抄』における往生叙述の方法の違いを確認できたと考える。

次に、『閑居友』には十八例ほどの往生叙述を確認したが、その中で上巻第二話の如幻僧都の往生を、

日ごろすぎて、庵のほどにいひしらぬにほひの侍ければ、あやしくてみければ、手をあはせて西にむかひて、命つき給ひにけるなるべし。その年は六十二。ころは十二月二日にてぞ侍ける。

と奇瑞を伴って記し、他に善殊僧正（上巻第三話）などにも往生叙述がみられる一方で、妻に責められて発心した「いふかひなきあやしの男」（上巻第一四話）の説話は、

つひにはいかゞなり侍にけん、あはれにおぼつかなくこそ。

と結ばれており、義朝の郎等の四郎入道（上巻第一六話）の説話などと共に往生叙述がなされていないことは、やはり『撰集抄』とは方法を異にしていると言わねばなるまい。

『閑居友』全体の構成は「高僧→凡僧→俗男→女性」と往生伝の配列に倣いながらも、上巻から下巻に至るまで往生叙述が見出せる事は、配列において説話の人物（主体）を意識しながらも、それが集としての論理にまで結び付く事は終になかったことを物語る。そうした意味からは、廣田氏が『発心集』と往生伝の中間的性格として一括された、『閑居友』・『撰集抄』の往生譚も、往生叙述の論理において一線を劃すべきものと考える。

ところで、先にあげた『撰集抄』が「きは」の意識を綴った7と32の評論部は、『閑居友』の最終話下巻第一一話の、「あやしのげす女」が不断の念仏によって生前に来迎の期を知り、その通りに往生を遂げる説話の評論部の影響下にあると認められるように思う。

さやうの際のものは、後の世の事をば、かけふれ思ひもよらず、たゞさしあたりたる事をのみこそ、なげきも悦もする事にて侍めるに、

『閑居友』は臨終を予め知る奇瑞とともに「あやしのげす女」の往生叙述をしており、当話の構造は『撰集抄』の往生叙述の論理と合致するものであることに思い当たる。『閑居友』最終話は、語句レベルにおいても『撰集抄』に強い影響を与えているが、[注19]『撰集抄』の集全体に働く論理も、『閑居友』の影響から無縁ではありえないのである。しかしながら、『閑居友』がこれを集の中での各話の往生叙述の方法にまで構築しえていないのに対して、『撰集抄』は『閑居友』を享受しつつも、これを集としての叙述の方法にまで推し進めたのであった。

『発心集』・『閑居友』・『撰集抄』といった中世仏教説話集は、それぞれの方法で往生伝を継承し展開させていった跡が窺われる。往生伝からの本質的な脱却を最も明確に意識していたのは、やはり『発心集』であったかもしれないが、廣田氏の言う『発心集』と往生伝との中間的な性格の内実は、『閑居友』が集の配列という枠組みの上で往生伝を利用しつつも、個々の説話においてそれとは違うものを目指したのに対して、『撰集抄』は隠遁・遁世の文学とされながらも、最も往生伝の往生叙述を継承・展開させ、説話集としての往生叙述の論理にまで到達させたという点にあるのである。そうした意味において、『撰集抄』は往生の集と呼びうるであろう。

注

(1) 拙稿「『撰集抄』の方法—仮託説話・非仮託説話併存の意味に向けて—」(『詞林』第三号　昭63・5)。

(2) 美濃部重克校注『閑居友』(中世の文学・三弥井書店　昭57・5)の解説参照。

(3) 「文学史研究」一七・一八号(昭53・4)。『中世仏教説話の研究』(勉誠社　昭62・5)に再録。

(4) 『論集日本文学・日本語』3中世(角川書店　昭53・6)所収。

(5) 「『閑居友』序説(二)」(『早稲田大学教育学部学術研究』第一七　昭43・12)。

(6) 「語文」第三十一輯(昭48・7)。

(7) 「同朋国文」第13号(昭51・3)。引用文中にある、氏の作成された別表は、次のようなものである。

説話集(テキスト)	霊異記(大系本)	法華験記(続群類)	今昔・本朝仏法部(大系本)	発心集(鴨長明全集)	閑居友(古典文庫)	撰集抄(岩波文庫)
総話数	一一六	一二九	四〇一	一〇六	三二	一二二
発心譚(遁世・隠徳譚)	二話(〇・九%)	二六(一・六)	一三三(五・六)	一九(一七・九)	一一(三四・四)	一五(一二〇・七)
往生譚	一話(〇・九%)	一六(一二・四)	五九(一四・七)	一四(一三・二)	五(一五・六)	一一(一七・四)
往生の証明ある往生 / 往生の総数	2/2 (一〇〇%)	37/86 (八四・九)	79/109 (七二・四)	24/46 (五二・二)	4/10 (四〇・〇)	8/23 (三四・八)

(8) 「仏教文化研究」三(昭28・8)。『日本仏教思想史研究　浄土教』(平楽寺書店　昭34・11)に再録。

(9) 「仏教文学研究」第五集(昭42・5)。『日本文学研究資料叢書　説話文学』(有精堂　昭47・11)その他に再録。

(10) それぞれの引用本文は、以下の通りである。小島孝之・浅見和彦編『撰集抄』(桜楓社　昭60・4)。三木紀人校注『方丈記　発心集』(新潮日本古典集成　昭51・10)。『閑居友』は注(2)前掲書を用いる。

(11) 諸書にみられる増賀説話については、安田孝子氏「増賀聖人説話一覧—『撰集抄』注釈余滴—」(『椙山国文学』六　昭57・3)に詳しい。

(12) 三木紀人氏は、新潮日本古典集成『方丈記　発心集』の頭注において、「師の世俗との妥協を撃つ増賀の奇行。その奥にある悲しみ。叡山復興のためにあえて名利を引き受けねばならなかった良源。純粋な弟子と才覚十分の師との不幸な関係を語る説話である。」とされるが、それに似た構図が『撰集抄』にもみてとれると考える。

(13) その経緯については、注(2)前掲書の補注93に詳しい。『閑居友』と『撰集抄』が影響関係を有するという考え方は定説化していると考えるが、この二話に直接関係が有るか否かは、論点を根本的に左右するものではない。

(14) 最近、渡邊信和氏が「『撰集抄』編者の女性観」(『説話文学研究』第二十四号　平元・6)で、「女性を主人公として描いた説話」という立場からこの説話を取り上げている。『撰集抄』末尾の表現について、「二人の転生を考えているのは、同行としての女性を考える意味で示唆的であろう」とする見解には、首肯すべきものがある。但し、この一話においては「同行として」ではなく尼の往生そのものに主題があると考えてよかろう。

(15) 「往生の文学—『日本往生極楽記』をめぐって—」(『日本文学』一四巻一二号　昭40・12)。古典遺産の会編『往生伝の研究』(新読書社　昭43・5)に改稿して再録。引用は後者による。

(16) 今成元昭氏が「説話と軍記—往生話をめぐって—」(注(15)前掲書所収)の中で、「今昔物語集」から「死ニケル時ノ作法現ニ極楽ニ参リヌト見エケリ」(十九36)や「浄キ衣ヲ着テ西ニ向ヒテ端坐シテ掌ヲ合セテ、念仏ヲ唱ヘテ失セニケリ」(十五17)の例を引きながら、「臨終時の作法によって往生成否の認定がなされている。その第一は、至心に極楽を願うという正念を失わず(心ヲ不乱・心ヲ不違)して弥陀の念仏を唱えることであり、その際には西向・端坐・合掌などの姿態をとるのが普通である。」としている。

(17) 「十訓抄」巻十、「古今著聞集」巻四所収の類話等は、往生について語っていない。

(18) 注(4)前掲田村氏論考。

(19) 拙稿「『撰集抄』成立に関する試論—巻末意識とその性質—」(『中世文学』第三十三号　昭63・6)参照。

——大阪大学大学院博士後期課程在学—